

【令和2年度航空研究センターシンポジウム（7月17日実施）：発表2】

太平洋戦域における軍事作戦の変遷

－冷戦期と現在の経空攻撃作戦をめぐる攻防を中心に－

政策研究大学院大学副学長
道下 徳成

はじめに

本日は「太平洋戦域における軍事作戦の変遷－冷戦期と現在の経空攻撃作戦をめぐる攻防を中心に－」という題名でお話いたします。このテーマを選んだ意図ですが、現在、主に中国に対してどう取り組むかということが、一番大きい政策上の課題になっていると思います。しかし、いろいろな要素があり、将来どうなるか分からないので、どういうふうに捉えればいいのかというのは、なかなかつかみどころのないものがあります。そういう意味で、割合最近で、しかも似たような戦域で似たような形で競争した冷戦期のことを見れば、参考になることが多いのではないかとこの観点で、このようなテーマに致しました。そこで、本日は最初に冷戦期にはアメリカと日本が一緒になってソ連とどういう競争をやったか、ソ連に対してどのように対応したかということをお話しした上で、簡単に現在のことにも触れていきたいと思います。

加えて、本日の大きいテーマの1つとして、ゲームチェンジャーというものもあります。ゲームチェンジャーと言えるものが冷戦期にあったのかということについて答えを言ってしまうと、これがゲームチェンジャーだったという決定的なものはなかったと思います。というよりも、やはり技術的ないろいろな積み重ね、発展、そして組織的な工夫や作戦上の革新など、それらが組み合わせあって、その積み重ねで、全体としてのバランスが西側に有利になって、西側が勝利した。そういうふうには見えています。

1 冷戦期における日米とソ連の攻防

それでは、そのような前提で冷戦期の状況を見ていきたいと思います。

冷戦期の北太平洋戦域における重要な空の戦いというのについては、ペトロパブロフスク周辺における攻防と、アレクセイエフカ、ウラジオストク等、沿海州地域における攻防というものがあります。日米からすると、ペトロパブロフスクとウラジオストクが最大の攻撃目標でした。その背景には、米ソの冷戦、あるいは西側と東側のグローバルな対立があったわけですが、今日は、個々の戦域を取り上げて説明します。大まかに言うと、ペトロパブロフスクの戦域の方はアメリカが第3艦隊を中心にして独自に対応し、沿海州の戦域は、日本とアメリカが一緒になって対応しました。

では、攻防のバランスを見てみます。実は冷戦期は西側のディスコース（言説）としては、ソ連が攻めてくるとか、ソ連の脅威に対応していかなければいけないというのがありました。ただ、それは表向きのディスコースで、実際は、太平洋戦域ではソ連は防勢で、日米は攻める側でした。なぜそうなっていたかというと、ソ連はアメリカに対して戦略核攻撃を加えるための原子力推進型の弾道ミサイル潜水艦をオホーツク海で運用していましたので、それを守っていたことから防勢と言えるのです。勿論、弾道ミサイル自体は攻撃兵器ですが、それでも潜水艦発射型のもは、どちらかといえば第2撃能力として認識されているものでした。そして、日本やアメリカは、太平洋戦域でソ連を攻めて困らせようという作戦を取っていたわけです。

日本とアメリカが一緒になって、どのようなソ連のターゲットを破壊しようとしていたかという、最初は防空戦力を叩いて、その後、アレクセイエフカ、ウラジオストク、ハバロフスク、ペトロパブロフスクなどの重要軍事施設を叩こうとしていました。逆にソ連としては、そういう日米の攻撃戦力を破壊しなければ自分達がやられるから、守りを行っていたということです。

2 冷戦期のアメリカ側の主力装備等

アメリカ側の主力はどういうものかと言いますと、1つは戦術航空戦力で、これには在日米空軍のF-15、F-16などがありました。また、防空戦力としての航空自衛隊がありました。それにプラスアルファとして、時間的には少々遅れて到着するアメリカの空母戦闘群（CVBG）、戦艦戦闘群（BBBG）がありました。BBBGが経空攻撃に含まれる理由は、トマホークを搭載していたからです。1980年代途中から、水上艦艇が巨大な対地攻撃プラットフォームになったわけ

です。その結果 CVBG と BBBG が一緒に攻撃作戦を実施するようになりました。

そのような形で、かなり攻撃力を持ったのですが、当時、米国は太平洋戦域には地対地ミサイルを配備していませんでした。これは今でも続く問題です。日本にも対地攻撃用の射程の長いミサイルは配備されていなかったですし、韓国にも置いていませんでした。この状況は今も全く同じで、アメリカは地上の攻撃能力が非常に脆弱だったわけです。ただ、攻撃能力の欠如は、F-16 が入ってきてかなり改善されました。

3 冷戦期におけるアメリカ側の課題

航空作戦において、当時のアメリカには3つの大きな課題がありました。それらは、空母の防護、経空攻撃作戦、戦術核抑止の3つです。空母をどのように防護するかということは、今も同じですが、大事な問題です。ソ連は地上配備の兵器で攻撃するわけですが、空母は見つけることが困難である反面、少し攻撃を受けただけで運用できなくなるなど脆弱性もあり、これを克服する必要がありますがありました。

(1) 空母の防護

空母の防護に関連して、チェーンソー戦術（chainsaw tactics）と呼ばれるものがありましたけれども、給油機を飛ばしておいて、そこまで戦闘機が行って給油して、そこからまたなるべく遠くまで行って、その後また給油して、またその先まで行って、作戦半径ぎりぎりまで飛ばすということを繰り返しました。

その他、電波を出さないようにする電波放射管制（EMCON）、わざと雨が降っていたり、雲がかかっていたりしているところに入り込んで作戦する気象の利用もあります。これは、わざと気象の悪いところに入って行って航海するので大変です。それから、隠ぺい・欺瞞という方法もあります。これは、わざと空母と同じような電波を出す船を作って、それを別の所に行かせて、わざと電波を出させ、空母戦闘群がそちらに行っていると思わせるという方法です。

また、アリューシャン列島沿いでは、島の間に空母を置いて攻撃するという作戦がありました。これも作戦上のイノベーションですが、陸地近接作戦区域（Near Land Operating Area: NLOA）と呼ばれていましたが、島の間に空母が入り込める場所が20か所ぐらいあって、そこに空母を入れて、山とかを遮蔽物として使って、レーダーに映らないようにしながら攻撃するというのをやっていたのです。それはかなりきつい、危ない作戦と言われていました。

他に衛星攻撃兵器（Anti-Satellite Weapon: ASAT）もありました。ソ連は海上監視システム（SOSS）と呼ばれるシステムで衛星を使って空母を探そうとしていましたので、アメリカはそれを破壊するためにASATを使おうとしていました。あと、それまでは別々に行動していたアメリカの海空軍が連携・協力して航空優勢を取ろうとしました。この異軍種が協力するというのは組織上のイノベーションだと思われます。イノベーションとまでは言えないとしても、異軍種が協力するというのは意外と大変だと思います。

(2) 経空攻撃作戦

2つ目の大きな課題は経空攻撃作戦です。空母を守って、航空作戦を実施した後どうするか、どのような目標を破壊するかということはなかなか悩ましい問題でした。どういうターゲットを攻撃したらいいのかということをはっきりするために、意味のある目標（Targets that count）を選定するための研究もしていました。

そして、1980年代の中盤からは、米空軍は日本上空で戦域戦力運用演習というのを始めていて、100機以上の敵防空網制圧（Suppression of Enemy Air Defense: SEAD）機や攻撃機がSEAD作戦と攻撃作戦を演習するということも実施していました。

(3) 戦術核抑止

最後に3つ目の課題の戦術核抑止です。これは何を意味するかと言いますと、アメリカの最大の弱点は、空母等、いわゆるハイバリュー・アセットを用いて攻撃しているため、これに対して核を使われたら一発でアウトなわけです。そこで、アメリカはいかにしてソ連に戦術核を使わせないかということを一生涯懸命考えていた。それで得た一応の答えというのが、アメリカも自分から使うつもりはないのだけれども、戦術核能力をかなり備えて、本当は面倒くさくて嫌で嫌で仕方ないのですが、空母にも核兵器を載せて、いざという時はソ連に核報復するぞということを見せつけておいて、それでどうにかこうにかソ連に核を使わせないようにしていたわけなのです。戦術核抑止とはこのようなことを意味します。

しかし、これも、どの程度信頼性があったかのかという点では疑問が残ります。なぜなら、やはり海上で核を使うことは付随被害が少ないために使い易いということが言えるからです。これに対して陸上、地上に対して核攻撃を行うと、相当な付随被害が出ます。そのため、核を海で使うのと陸で使うのでは、エスカレーションするかしらないかという点で、心理的にも政治的にも大きな差

があります。したがって、アメリカの戦術核抑止戦略が効いていたかどうかというのは判断の難しいところでした。

4 冷戦期についての結論

ここで、冷戦期に関する結論について申し上げますと、冷戦期の太平洋戦域におけるゲームチェンジャーは何か、1 つだけ挙げてくださいますと聞かれたら、私はトマホークミサイルだったと答えます。それまでは拮抗していたバランスが、トマホークミサイルによって、あらゆる水上艦艇に攻撃能力が備えられるようになって、大きくアメリカの能力が高まったので、やはり軍事バランスを変えるきっかけになったと思います。他方、ソ連の方は、宇宙から空母や戦闘機を見つけるということを生懸命やりましたが、結局は余り上手いかず、十分に見つけれないまま冷戦が終わりました。ですから、その部分では、攻防のバランスが西側に有利になって冷戦が終わったということです。

5 冷戦期と現在との比較

次に冷戦期と現在との比較ということで、各論点についてお話しします。冷戦期と比較して、今は何が変わっているかと言うことに関し、作戦的などころだけお話ししますと、現在、中国が A2/AD をやっていると言いますけど、これは、昔ソ連がアメリカに対してやっていたことと全く同じです。名前が変わっているだけで、全く同じです。当時は海洋支配とか海洋拒否とか言っていましたが、例えば、昔は“sea denial”と呼んでいたのが、今は“area denial”と変わったというだけです。ただ、昔はやはり海軍が中心だったので“sea denial”と海軍に特化した名前と呼んでいましたが、今は統合になっているので、より一般的な“area denial”となっているのです。

そのために使っている手段には H-6 という長距離爆撃機、対艦ミサイル搭載潜水艦（SSGN）等があります。唯一、冷戦期には存在しなかった、新しい兵器は対艦弾道ミサイル（ASBM）です。その中には、DF-21D とか DF-26 などがあります。ただ、実はソ連も 1950 年代に、核付きの対艦弾道ミサイルを考えたことがあったのです。ただ、その当時は空母を全然見つけられないということで、核弾頭を搭載したもので空母を破壊できないから止めるということになりました。ですから、現在と同じようなアイデアはあったのです。したがって、ASBM でさえ全く新しいものとは言えません。このように、冷戦期と現在とでは余り変わらないということが言えると思います。

また、アメリカの地上配備型の攻撃アセットが絶対的に少ないという問題も継続しています。アメリカにとって、攻撃アセットの前方展開をどうするか、地上配備の巡航ミサイル（対艦・対地）、弾頭ミサイル、攻撃機をどうするかというのが大きな問題となっています。

6 現在と冷戦期との相違点

そのため、現在と冷戦期との比較の結論として、私の認識としては、冷戦期と比べて大きく変わったと言えるものは、サイバー空間のみです。他のものは、基本的には、冷戦期にあったものの延長線上にあります。

もう1つ大きく違っている点は、センサー技術が良くなったということがあります。この結果、現在は冷戦期より水上艦艇が相当見つけやすくなっています。これはアメリカにとっては空母の運用上、相当不利で、アメリカは今後どう対応するのかという問題もあると思います。

おわりに

最後に、今後のゲームチェンジャーはどうか、ということですが、ここで、「3本の矢」か「千本の針」か、ということでお話したいと思います。この「3本の矢」か「千本の針」か、という議論はアベノミクスに関しても行われている議論です。アベノミクスは金融政策、財政政策、成長戦略の「3本の矢」で構成されると言われますが、3つ目の矢はどのようなものかについては議論があります。専門家の中には3本目の矢は、矢（アロー）ではなくて、千本の針だという言い方をする人がいます。これはどういう意味かと言うと、1つの重要な成長戦略を実施したから日本経済がいきなり元気になりましたとか、テレワークを始めると日本経済が元気になりますとか、文書の電子化を進めたらすごく効率が良くなりましたということではないということです。

それは、成長戦略の中には働き方改革もあるでしょうし、テレワーク、電子サイン、電子決裁、電子マネーなどもあれば、農業の高度化などもあるでしょう。そのようなことのあらゆる積み重ねがあり、小さなことを千本集めると、ひいては革命的な変化につながるという議論です。私自身もどちらかというところ「千本の針」派です。ですから、軍事的にも1つの凄いゲームチェンジャーあったから変化があったというのではなくて、いろいろなことを、いろいろな場所で努力する人がたくさんいれば、ある時点で振り返ったときに、あの時は非常に大きな変化があったと評価できるのではないかと考えています。

エア・アンド・スペース・パワー研究（第7号）

ですから、ここにいらっしゃる皆さんにも、ゲームチェンジャーを探して旅に出るのもいいのですが、旅に出る暇があったら、ご自身のすぐ周りにある小さい革新をなるべく多く実施するというのが長期的には意外と大きなゲームチェンジャーになるのではないかと考えていますということをお伝えしたいと思います。以上でございます。